

特集
まえがき

教育の構造が問われている

藤本文朗

教育における『日本の科学者』への期待は大きく、日本科学者会議（JSA）は重要な役割を担う。本誌には毎号教育学者だけでなく、多分野の会員が鋭い論文を投稿し、私自身学んできた。しかし、正面から教育学の科学性を論じた特集がこの10年間、取り上げられてこなかったことは残念である。

筆者は、教育学の一分野である障害者教育臨床の研究者にすぎない。教員養成に40年余関わり、教育学部附属校長を経験し、教育学の教員と接し、教員養成について考えてきた。

そこで筆者らは、この特集「教育の構造が問われている」を企画した。出筆者は女性3名男性2名で、渡辺、近藤は学校現場の経験がある。本特集の構成は、前半の堀尾、前田が教育学の基礎研究を、後半の渡辺、近藤、藤本が臨床的研究をそれぞれ論ずる。

堀尾は、戦前の反省に立ち、戦後の憲法＝教育基本法体制が国家権力の介入に崩されてきた点について述べ、その抵抗運動を含め、教育思想研究者として分析した。国際的動向を踏まえ「教師の専門性の喪失」「新自由主義、新国家主義と教育の商品化」を批判し、「子どもの最善の権利を」と述べ、「真理と正義と平和を希求する人間育成を戦争で未来社会を奪ってはならない」と帰結する。

前田は日本教育史の研究者であり、「主体的な学び」の政策が教育課程論の中で形骸化

していることを論じた。2018年3月に出された「高等学校学習指導要領」の新設必修科目「公共」に触れ、道徳の教科化の中で「平和主義」は「安全保障と防衛」に置き換えられていると指摘した。

渡辺は、小学校の算数教育実践を通し、子どもの「自尊感情」と人格形成と学力との関係を述べた。本誌にこのような論文が掲載されれば、小中学校教師のJSA会員が増えるであろう。

近藤、藤本は、教育臨床研究者として、教員養成、教師教育論の歴史を概括し、経験を通して論じた。専門性を高め、子ども達の発達を保障するための試案を批判を恐れず、専門家養成という点から、医師養成を参考に執筆した。教員養成大学では、一般教養とともに専門の教育学の理論、授業学を通じた実践ができなければならない。

教員養成大学の定員が減少し、多くの大学で教員免許状の取得が可能になり、教師の「教える」専門性の低下を引き起こしている。未来の社会を担う子どもと教師のために本特集は役立つであろう。

（ふじもと・ぶんろう：滋賀大学名誉教授、
障害者教育臨床）